

平成30年11月22日

松阪市議会議長
中島清晴様

無所属の会・みらい
(西口真理、海住恒幸)

研修会参加報告

議会報告会の在り方を検討する目的を含め、ワークショップの進め方を主とする研修会に参加しましたので、ご報告します。

記

研修会の名称

「対話型議会報告会のコツ研修～議会報告会をもっと身近なものにする極意～」

期日 ①平成30年10月23日(火) ②11月9日(金)

時間 両日とも午後1時～4時30分

会場 ワークセンター松阪・労働会館2階

<参加者>

10月23日＝26人(松阪市議会議員、県内・県外市町議会議員、市民、公務員)

11月9日＝25人(松阪市議会議員、県内・県外市町議会議員、市民、公務員)

なお、西口は11月9日のみ、海住は両日参加している。

<研修会の趣旨>

「説明・質疑応答」のパターンを超えた「明るく前向きな議会報告会・対話型議会報告会」に変えていくためのノウハウを、「対話の場運営の達人」と評判の会議ファシリテーター普及協会が伝えるという内容で、議員だけでなく、市民や公務員等も参加対象。初日に基本編、2日目に実践編を行うというものだった。

<研修会参加の趣旨>

議会改革の一環で議会報告会が全国の多くの議会で実施されているが、開催する議会の側、参加する市民の双方に、手ごたえや納得感につながっているところは稀であろう。松阪市議会でもご多聞に漏れずという実態がある。たまたま、広報広聴委員会の委員間の議論の中で、ワークショップ形式の報告会にしてはどうかという意見があった。わたしは、昨年8月に広報広聴委員会に入り、同年7月に実施された選挙で初当選したばかりの議員を中心とした構成員の中で活動して2年目を迎えているが、かれらの気持ちの中には既存の報告会を明るくわかりやすく、特に若い人が来たくくなるような報告会に変えたいというエネルギーが強いように感じている。ワークショップ形式はその形を象徴するものである。ワークショップには最も重要なファシリテーション技術をスキルアップする研修があると聞いたので参加することにした。

<内容>

●導入（開始15分前）

5つのテーブルに分かれたワークショップ形式で実施。風船などで会場の雰囲気明るく、クロス掛けのテーブルには自然の造形物が置かれるなど、堅いイメージを払拭されていた。参加者は、受付でいただいた名簿はすでにグループ分けが済ませてあった。あらかじめ、講座開始15分前には会場に入るよう主催者より指示を受けていたが、講座が始まるまでに同じテーブルに着く者同士、名刺交換を済ませるなどなごんだ雰囲気を作っておくことをねらったものである。

「気楽に楽しく」、「明るく 参加しやすい」、「対話型議会報告会～説明・質疑型から対話型へ」等々。会場のホワイトボードや壁面には、青や赤などのマジックで大きな文字にした標語を表した模造紙が張り出されていた。その中に、初日は「基本編」で、2日目に「実践編」といったメニューもあった。参加者は、講座が始まるまでに見るはずだという設定である。これら自体、この研修の中で学ぶファシリテーションの一環として意図をもったものとなっている。

●基本編＝10月23日

話し合いを、次の4つのレベルに区分した。

レベル0 = 連絡・報告会
レベル1 = 同意を求める場（説明会）
レベル2 = 意見を聴く場
レベル3 = 対話の場（市民参加）
レベル4 = 対話の場（議員のみ）

今回の研修の目的は、市民参加のワークショップ方式の議会報告会の開催に向けた取り組みであったことから、講師は「レベル3」と位置づけた。

講師によれば、めざすのは、「説明」型（レベル1）や「質疑応答」型（レベル2）でない、「対話」型の会議であるとした。「対話」型の中でも、議員に委ねるべき「課題解決」型（レベル4）ではなく、**市民といっしょに夢を語り合える対話型（レベル3）の会議**とすべきだとした。

このような会議は、「堅苦しい会議」であってはならず、会場設営や資料の見せ方、ホワイトボードの活用の仕方などに工夫をし、楽しいものでなければならないとした。ただ、「楽しいだけでなく、中味は濃い話し合い」となるようにするためのファシリテーション力は求められる。

質疑応答ではない対話型の会議。議会報告会にその手法を生かすというものだが、それについては、11月9日の「実践編」でおこなうことになった。

●実践編＝11月9日

静岡県裾野市議会の議会報告会の事例が紹介された。初めの50分間で「議会報告」をおこなったのち、会場を移動し、グループワーク中心のワークショップへと展開する仕組みだ。ワークショップの運営はファシリテーションをサポートするNPO法人が協力する。

グループワークにはテーマを設ける。ファシリテーターが付箋の使い方や計測などルールを説明したうえで、進行していく。

実地研修として、参加者がグループワークを体験しながら方法を学んだ。「市民に親しまれる市役所にする」というテーマで模擬グループワークに取り組んだ。

ファシリテーターは、2色の付箋を用意し、初めは1色のみ使用させる。

付箋を使ううえでのファシリテーションの基本中の基本は、「自分の意見を書いてください」とは言わないことだそう。代わりにどうするかと言えば、「何でもいいからたくさん書いてください」と言うことだとしている。そうすることによって、自分の意見にとらわれにくくなるのだという。また、「実現可能なことを書いてください」と言ってもいけないとした。「量」を多く書き出すこと

で「質」が担保できるのだという。

ともかく、数多く書かせること。絞り込みは次の段階だ。

付箋を貼りながら思いついたことがあれば、別の色の付箋に書いて貼る。ファシリテーターは、「もっと付け足すことはない？」と促すことが大切だ。付け足しのほうが多くなるのがよいという。

作業のあいだ、じっくり考えることはやめる、最高によい結論を出すより時間厳守。決められた時間内に出た結論が結論であるとした。

<所感>

現在行われている松阪市議会の議会報告会は、前回から見直しがされて内容も分かり易くなったものの、それでもなお参加者が少なく、残念ながら一般市民が気軽に意見を言える雰囲気ではない。また、内容的にも、行政への要望や意見が多く、議員もまるで行政答弁のような答えに終始する事が多く、今回の講師の言われる「炎上型」報告会となってしまう事もしばしばである

いかにすれば女性や若者を含めた多くの方々に参加していただだけ、楽しく有意義な意見交換ができるか、そんな問題意識を持って今回のセミナーに参加した。

まずは「皆さんのキタンのないご意見をお願いします」は NG。個人の意見を言わせてはいけない。との講師のセンセーショナルな言葉。その真意は？

議員と市民が対立する講義形式の報告会から、グループでの対話型へ。その場合、明るく前向きな雰囲気作りとテーマ設定が重要となる。参加者全員が発言でき、対話によってグループの合意形成に導いていく。問題解決型ではなく夢実現型の対話を。

これまで何度もグループワークに参加し、付箋も使って来たが、今回のセミナーほど楽しく盛り上がった事はなかった。やはりファシリテーターの力量による所は大きいと実感した。すべてが議会報告会に取り入れられるわけではないと思うが、従来の形式にとらわれず、議員と市民が同じテーブルにつき、参加者全員が発言できる楽しい（参加者に満足して帰ってもらえるような）議会報告会に変えて行かなければならないと考える。そのためにも、今回のセミナーは大いに示唆に富んだものであった。（西口）

議会報告会での質問は、参加した市民一人ひとりに認めるのではなく、一人ひとりの疑問はグループワークの中で出し合い、グループ全体の質問にまとめ上げて質問を形づくるのだという。そのことによって、限られた数の特定の個人

だけが質問のマイクを握るのではなく、参加者みんなが場を共有できるようにするのをねらいとしている。しかし一方で、直接、議員と真剣に議論を交わせる場であると期待を持って議会報告会に参加する市民の期待に反したり、問題点や課題を掘り下げて議論する場にはなりにくいという弱点を持ちほしないだろうか。(海住)

以上